

研究ノート：

乳幼児期における環境教育 —地域団体と連携してゴーヤのグリーンカーテン作りに 取り組んだ9年間の実践を通して考える—

山下 清美^{*1}

(2017年12月27日受理)

Environmental Education in Early Childhood. —Consideration Through Nine Years Practice that Tackled Making Goya's Green Curtain in Cooperation with Local Organizations—

Kiyomi YAMASHITA

Key words：乳幼児期 環境教育 地域団体 ゴーヤグリーンカーテン 実践記録

1. はじめに

近年、大問題になっている地球温暖化。私が幼い頃は、気温33℃といたら本当に真夏日で、暑くてしょうがなかったが、今や気温33℃では驚かず、猛暑日の36℃37℃と上がるばかりだ。そして、熱中症になる人が続出している。また、異常気象で、いたるところで地震が起きたり、台風や大雨で川が氾濫したりなど、TVや新聞等で問題になっていて、実生活のあらゆるところで異常事態を感じる。「この先、地球はどうなってしまうのか？」と心配になる。もちろん、これは国際的な問題で、多くの国が集まり話し合いが行われ、取り組まれているものの、未だに大きく改善される糸口は見つからない。このようにこれからますます地球の環境は悪化する中で、子どもたちはこれから先の長い人生を、この地球で生活していかなければならない。私たち大人は、そして保育者は、子どもたちに何を伝えていったらいいのだろうか。それは、いつ、どのように伝えたらいいのだろうか。

古来より「三つ子の魂百まで」と言われるように、幼い頃に受けたしつけや教育によって形成された性質・性格は、百歳になっても根底は変わらない。しつけや教育、人間に必要な心の情操教育の影響は生まれてから3年間でほぼ確定されてしまうなど、幼い頃の教育は大切であると、語り継がれている。これは西洋でも、「The child is father of the man」という言葉で直訳すると「子どもは大人（人類）の父である」という言葉で、「三つ子の魂百まで」と同じ意味の諺が語り継がれている。

また、中国では「孟母三遷」といわれる有名な話がある。孟子の母は住居を三度移し変えた。具体的にいうと、はじめは墓地の近くに住んでいたが、孟子は葬式ごっこをして遊ぶので、市場の近くに引っ越した。すると、商人の真似ばかりして遊ぶので、今度は学校の近くに引っ越した。すると、孟子は礼儀作法の真似事をするようになり、孟子の母は「この地こそふさわしい」と言って、その地に落ち着いたという故事の教えである。幼い頃の環境は子ども

^{*1} 筆者は昭和52年4月～平成29年3月まで、仁愛女子短期大学附属幼稚園に勤務し、平成10年4月～平成24年4月まで主事、平成24年4月～平成29年3月まで園長を務めた。

に大きな影響を与えるので、いかに大切であるかということ伝えていく。

この2つの諺から考えると、地球の環境について学び始める時期は、乳幼児期からであり、地球を大切にしている環境の中で生活することの必要性を感じるのである。では、乳幼児期に保育者はどのように環境を構成したらよいか、乳幼児にとってどのような経験が必要なのかを考えてみたい。

本稿では、地域団体の協力を得てゴーヤのグリーンカーテン作りに取り組んだ9年間の実践を通して考えてみることにする。

2. 取り組み開始の経緯

仁愛女子短期大学附属幼稚園（以下「仁愛附属幼稚園」という）ではエコ活動として、ごみの減量化や分別、ペットボトルのキャップ回収、こまめに電気を消すなど、些細なことだが身近で出来ることを園全体で取り組んでいた。「もっとできることはないだろうか?」と思っていた平成20年5月の終わり頃、「ゴーヤのグリーンカーテン運動」に参加依頼があった。これは、「土の会」という市民グループ






の活動の1つで、ゴーヤによるグリーンカーテン作りを広める運動である。目的は地球温暖化防止運動の一環として、市民の誰もが参加できるゴーヤによるグリーンカーテン作りの運動を福井に広げていこうというものだ。なお、「土の会」とは、自分たちの街を、自分たちの力で、自分たちが学習・実践することによって、少しでも社会を明るくしていこうという思いを持った市民の集まりである（平成27年3月よりNPO法人化「特定非営利活動法人ふくい土の会」）。

そこで、この活動に賛同し、仁愛附属幼稚園でも、ゴーヤのグリーンカーテン作りに取り組むことにした。しかし、私たちはゴーヤのグリーンカーテン作りは全く知識がない状態だったが、「土の会」の指導・協力でスタートすることができた。

3. 実践記録—活動の経緯—

(1) 活動内容一覧

	年 度	活 動 内 容
1 年 目	平成20年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「土の会」より活動趣旨説明を受ける。 ・「土の会」より提供されたゴーヤの種や苗を、バザーにて保護者や地域の方に配布する。 ・「土の会」に棚を作ってもらい、苗植えの準備をする。 ・土作り、苗の植え方、水やり、摘心^{*2}の要領など、具体的に指導を受けながら、初めてのグリーンカーテン作りに取り組む。 ・ボランティアの会「おばあちゃまクラブ」の協力を得ながら、年長児が中心となって、ゴーヤの苗を植える。 ・子どもたちと水やりをしたり、肥料をやったりして世話をする。 ・時々「土の会」の方が様子を見に来てくださる。分からないことがあると質問をする。(特に摘心の仕方について) ・グリーンカーテンで出来た木陰を確認して、温度差を知る。 ・収穫して、ゴーヤチャンプルを作り、味見をする。

	年 度	活 動 内 容
1 年 目	平成20年度	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 60%;"> <p style="text-align: center;">＜ゴーヤを育てるワンポイントアドバイス＞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、深めのプランターに3本位植える。 (地植えならなお良い) 2、つるがしっかり伸びるように、しっかりした棚をつくる。 3、水はたっぷりやる。 4、2週間に一回位、肥料をやる。 5、1メートル位伸びたら、先を切る。 <p style="text-align: center;">(植える時期や、その年の気候によっても違う)</p> </div> <div style="width: 35%; text-align: center;">  <p>(図1)</p> </div> </div>
2 年 目	平成21年度 (実践1参照)	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスで保育者が子どもたちと昨年取れた種や頂いた種から発芽させることに取り組む。(「土の会」に指導を受ける) ・「福井市環境パートナーシップ会議主催の『みどりのカーテンコンテスト』」に応募して「みどりがキレイde賞 (学校部門)」を受賞する。
3 年 目	平成22年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「第3回全国緑のカーテンフォーラム」(甲府市地球温暖化対策地域協議会、山梨県地球温暖化防止活動推進センター山梨環境カウンセラー協会、NPO法人・緑のカーテン応援団主催)にポスターによる「活動記録」を発表する。 <div style="text-align: right; margin-top: 10px;">  <p>(図2)</p> </div>
4 年 目	平成23年度	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が描いた絵を全員写真に撮影して、「グリーンカーテンPROJECT2011」フォトコンテストに応募する。 ・そのフォトアート部門において「最優秀賞」を受賞。東京の環境省にて表彰される。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>(図3-1)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(図3-2)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(図3-3)</p> </div> </div>

	年 度	活 動 内 容
4 年 目	平成23年度	<ul style="list-style-type: none"> 幼稚園から種や苗を渡して家庭でグリーンカーテンを作った人に写真を撮っていただき、パネルを作成して、掲示する。 いろいろな人が見て、意識を高める効果が望まれた。  <p style="text-align: center;">(図3-4)</p>
5 年 目	平成24年度 (実践2参照)	<ul style="list-style-type: none"> 環境省「チャレンジ25」特別協力のもと「土の会」と「グリーンカーテン キックオフ会」を開催。同時に、「土の会」主催による、大人向けのワークショップ「ゴーヤの育て方教室」も開催。 この年より、毎年、土の会・保護者・おばあちゃまクラブの協力を得て、全園児で種を発芽させ、家庭でもゴーヤのグリーンカーテン作りに取り組む。
6 年 目	平成25年度 (実践3参照)	<ul style="list-style-type: none"> 「グリーンカーテン キックオフ会」を開催する。 「土の会」のみなさんが「ぼくの地球温暖化病を治して」を紙芝居(スライド)で全園児に指導する。 年長児がゴーヤの絵を描いて「土の会」の活動に展示する。  <p style="text-align: center;">(図4)</p>
7 年 目	平成26年度	<ul style="list-style-type: none"> 「グリーンカーテン キックオフ会」開催時に「土の会」のみなさんが、「ぼくの地球温暖化病を治して」という人形劇を通して全園児に指導する。  <p style="text-align: center;">(図5)</p>
8 年 目	平成27年度	<ul style="list-style-type: none"> 「グリーンカーテンキックオフ会」開催時に「土の会」のみなさんが「ぼくの地球温暖化病を治して」という人形劇を通して全園児に、指導する。今回は、地球レンジャーも登場し、一緒に苗を植える。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">(図6-1) (図6-2)</p>

	年 度	活 動 内 容
9 年 目	平成28年度	<ul style="list-style-type: none"> 園舎改築のため、仮設園舎にて活動する。活動場所は限られているものの、毎年行う活動をする。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>(図7-1)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(図7-2)</p> </div> </div>

(2) 実践1：2年目（平成21年度）の取り組み

昨年の平成20年度、始めて取り組んだゴーヤのグリーンカーテンは、何も分からずに一つ一つ教えていただきながらの活動であった。しかし、真夏になってゴーヤのグリーンカーテンが出来上がると、西日が差し込む部屋がいつもの夏と違って、とても過ごしやすくなったことや、ゴーヤの実が出来て初めて触ってみたり匂いをかいでみたりしたことなど、この活動を通して多くの経験が出来たことに教育的価値を感じ、平成21年度もこの活動を続けていくことにした。

2年目は1年目の経験を生かし、園で出来ることは出来るだけ自分たちでしようと教職員で協力して行ったが、種や苗などは「土の会」からいただき、協力してもらった。

<取り組んだこと>

- 1年目取れた種やいただいた種を発芽させてみた。つめきりで種の先を切って、水を浸した綿

や、ペーパーにのせて発芽させる。発芽したら土に植える。発芽の経験は保育者も初体験であったが、芽が出ると子どもたちも大喜びであった。



(図8)

- 1年目同様、少しでもグリーンカーテンを広げていきたいという思いで、種や苗を、保護者や地域の人に声をかけて希望者に渡した。
- 水やりや肥料のやりかた、摘心の仕方など、昨年の経験を生かして、取り組んだところ、1年目よりも青々とした元気なグリーンカーテンが出来上がった。



(図8-1)



(図8-2)



(図8-3)

- 「福井市環境パートナーシップ会議主催の『みどりのカーテンコンテスト』」に応募してみた。「みどりがキレイde賞（学校部門）」を受賞することができて、保育者も子どもたちも励みとなった。



(図9)

(3) 実践2：5年目（平成24年度）の取り組み

平成23年度、ゴーヤのグリーンカーテンの取り組みを通して、年長児全員が描いた絵を写真に撮影して、環境省主催の「グリーンカーテンPROJECT2011」フォトコンテストに応募した。そのフォトアート部門において「最優秀賞」を受賞。東京の環境省にて表彰された。これをきっかけとして、保護者にもゴーヤのグリーンカーテンへの意識が高まった。そこで、5年目の平成24年度は、各家

庭や地域に広げることを目標にした。また、「環境省『チャレンジ25』特別協力」のもと、「土の会」と協力して「グリーンカーテン キックオフ会」を開催することにした。

<取り組んだこと>

- 「グリーンカーテン キックオフ会」を開催することになり、おたよりを作って、保護者やおばあちゃまクラブの方に配布し参加してもらう。
- 年長児を中心に、おばあちゃまクラブの方に手伝っていただき、苗植えや水やりをする。
- 大人向けのワークショップ「ゴーヤの育て方教室」を開催。

スライドを使用し、地球温暖化についてや、ゴーヤの育て方を具体的に伝え、広める活動をする。



(図10)

「グリーンカーテン キックオフ会」でおばあちゃまクラブの人と苗植えをしている様子



(図11-1)



(図11-2)

ワークショップ「ゴーヤの育て方教室」の様子



(図12-1)



(図12-2)



(図13-1)



(図13-2)



(図13-3)

(4) 実践3：6年目（平成25年度）の取り組み

昨年（平成24年度）の取り組みで、最初に「グリーンカーテン キックオフ会」を開いたことは、みんなの意識を高めるために、とても良かったと思った。そこで、今年度も「グリーンカーテン キックオフ会」を開催することにした。

「土の会」のみなさんが手作りの紙芝居とスライドを制作。「ぼくの地球温暖化病を治して」を子どもたちに見せながら、どうしてゴーヤのグリーンカーテンを作るのかを、わかりやすく指導してもらったことは大変良かった。

<取り組んだこと>

- 今年度は、園児一人ひとりが発芽の経験をして、より一層意識を高め、園と家庭とで、取り組めるように試みた。



(図14-1)

方法

- おばあちゃまクラブの人に、子どもと一緒に種の頭を爪切で切ってもらおう。（一人10粒）
- 前もって形成しておいた牛乳パックに、キッチンペーパーを敷き、子どもがコップで水をキッチンペーパーがひたひたになるくらい入れる。
- その種を用意した牛乳パックの中に並べてふたをし、ビニールに入れて持ち帰る。（図14-2）
- 保護者には前もって説明し、また、おたよりで伝え、家庭でもチャレンジしてもらおう。
- 保護者や子どもに対しては、決して強制はしないように配慮する。



(図14-2) 平成26年度の写真



(図14-3)

- 年長児がゴーヤの絵を描いて「土の会」の活動に展示する。



(図15-1)



(図15-2)



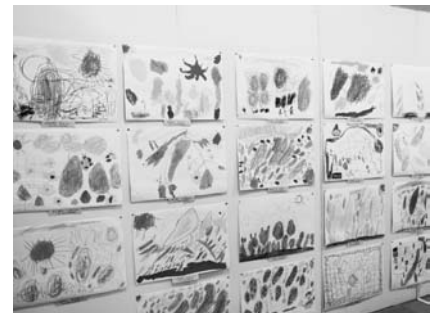
(図15-3)



(図15-4)



(図15-5)



(図15-6)

4. 全体的考察

平成20年から、地域団体である「土の会」の協力を得ながら取り組み始めた、ゴーヤのグリーンカーテン作りは、何もわからないままスタートしたものの、1年目で何とか作ることが出来た。西日があたる部屋の日差しが和らぎ、グリーンカーテンの効果が確認されたり、ゴーヤの実を収穫して触ってみたり匂いをかいでみたりゴーヤチャンプルを作ってみたりすることが出来た。子どもたちの中でゴーヤを知っている子はとても少なく、保育者も同様であるが、実体験の必要性を感じた。

特に、子どもたちと水やりをしたり、肥料をやったりなど一緒に世話をしながら交わした言葉や収穫の期待など、知的好奇心や心情面での育ちは大きかったと思われる。以前のことだが、大きく成長した卒園生が来園した時、話に出るのは思い出である。園庭にあったざくろの木の実を、先生が取ってきて食べたことがあったとか、それが酸っぱかったとか、ミミズがとても大きかったとか、葉っぱを集めてまごとししたとかなど、幼稚園時代のことを本当によく覚えているものだと感心したものだ。一人ひとりの思い出はいろいろであるが、全て園の

環境の中で遊んだこと、経験したことなのである。きっと、ゴーヤのグリーンカーテン作りに関わった子どもたちの心の中に、その子なりに感じたものが残ったに違いないと思われる。

9年の取り組みの中で、上手く育った年もあるが、青々と育たなかった年もあった。そのつど何が悪かったのかを考えて、植える時期や土の準備の仕方、水のやり方、肥料のやり方、摘心の仕方など試行錯誤した。毎年続けることで、コツがつかめるようになり、保育者の経験が大切であることも感じた。最近では、ゴーヤだけではなく、アサガオやフウセンカズラなどを混ぜてグリーンカーテンを作ったり、園舎改築中は、窓に設置できず、フェンスに棚を立てかけたりして、工夫した。これも毎年続けているためにできる工夫である。また、子どもたちは毎年大きくなり卒園していくことも考えると、毎年取り組む意義がある。

園が取り組むということは、子どもたちが経験できるということである。園が地球環境のために何かしら工夫しようとしたり、取り組んだりする環境の中で子どもが育つということが、大きな意味をもっていると思われる。

地域に広げていこうということは最初から考えていたが、決して強制にならないように心がけた。それは、保護者や地域の人々が「やってみよう!」という意識が大切だと感じたからである。園が毎年取り組んでいるのを見て、興味や関心をもってもらい「やってみよう!」と思った時が、良いタイミングなのだろう。そして、仁愛附属幼稚園が「土の会」の協力を得て取り組み始め、ずっと続けられたように、今度は園が保護者や地域の人に発信して、その役割を果たしていくという役割ができたなら、大変有意義であると考え。子どもは、あくまで大人たちの考えや、つくった環境の中で生活していくので、大人がどれだけ高い意識をもち、取り組んでいくのが重要なのである。ただ、子どもたち一人ひとりの家庭環境は違っている。保護者や地域に広げようとしても間違いなく無理なところもある。それを忘れてはいけない。まずは園で経験できることが大切と考え、家庭でもやってみたいと思ったときに無理なく進めたいと思う。

「土の会」の方には全面的に協力していただき、大きな取り組みが出来たと思う。また、毎年、工夫して教材を準備していただいたことにも感謝したい。この他にも、保護者やおばあちゃまクラブの方など、たくさんの人達に関わってもらい、子どもも保育者も、人との関わりの有り難さを感じる事が出来た。また、「土の会」の助言を得て、福井市や甲府市、環境省の活動に積極的に参加したことで、子どもたちや保護者、そして地域の人や保育者の励みになったり、意識の改革になったりした。特に、その取り組みにたくさんの人や団体、国県市町が取り組んでいることに、とても驚いたと共に、明るい未来を感じることができた。

5. まとめ

環境の中で育つ子どもたちだが、近年、子どもをとりまく環境は一段と厳しさを増してきて、なかでも幼児の自然体験をはじめとする体験活動の欠如が指摘されている。そのような中、乳幼児期の子どもたちへ自然体験の機会を提供しようと活動する団体や個人が増え、「森のようちえん」という呼び名の活動が広まってきている。これは1950年代にデンマークで生まれたスタイルで、自然体験活動を基軸にした乳幼児期の教育である。森だけでなく、海や川や野山、里山、畑、都市公園など、広義にとらえた自然体験をし、自然に触れることや、思い切り遊ぶこと、人と関わることや、互いに育ち合うことなど、その育ちの願いはたくさんある。「森のようちえん」については、ここではこれ以上触れないでおくが、乳幼児期に自然に触れる大切さは同じであろう。

仁愛附属幼稚園で取り組んだ9年間におよぶ「ゴーヤのグリーンカーテン作り」の活動を通して、改めて自然環境に触れる大切さや、目的を持って活動することの教育的な意義を理解できた。このような幼児の育つ環境作りは、保育者によってつくられる環境であり、園の方針によって築き上げられる環境である。自然に触れて育つことは、乳幼児にとって大切なことであるので、子どもの育ちを読み取り、考えながら環境を構成していける保育者を育てていく大切さを感じた。